小松大橋

手塚光義

一、位置

古の北陸道は道路法の制定以來、金澤市の眞中、武藏ヶ辻にて二路線に分割された。東方富山市方面より來るを國道十一號線と云ひ、西方福井市方面より來るを國道十二號線といふ。

石川縣小松町は金澤市から約三十粁ほど距つた國道十二號線中の要衝で、梯（カケハシ）川の左岸に發達した所である。織物工業が盛であり、九谷燒の本場であり、また全國的有名な小松製鋼所も此所にある。

然るに近年二度も大火災の見舞ふ所となり、街の目貫の場所は殆ど燒け盡した。その結果所謂燒け太りで、區劃整理を行ひ市街は見違へる樣な美觀を呈し、縱貫する國道の如きも幅員九米の堂々たるものとなつた。然し町の東端梯川に接する部分は、燒け殘りが殃して舊態依然たるものであり、金澤市方面への快速な交通運輸を阻止して居つた。

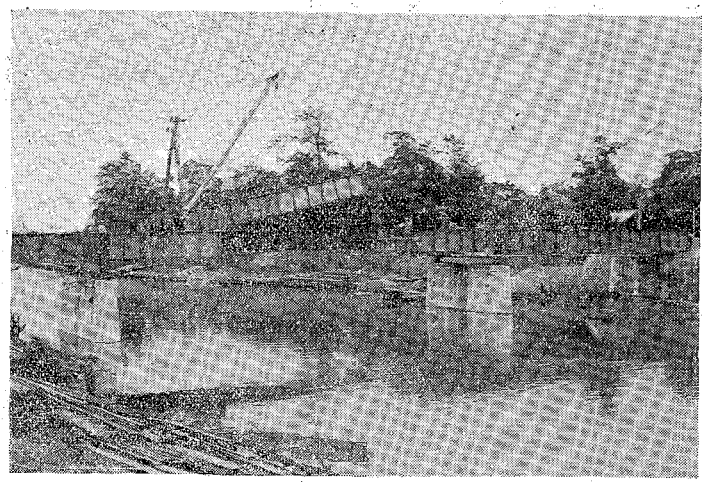
偶ゝ昭和九年度の時局匡救事業として本區間の起工を見た事は、同地方のため特にまた日本海沿岸交通のため誠に慶賀すべき事であつた。

小松大橋は實に此の新路線の梯川に架設されたるもので、本事業の主たる部分を占むるものであつた。

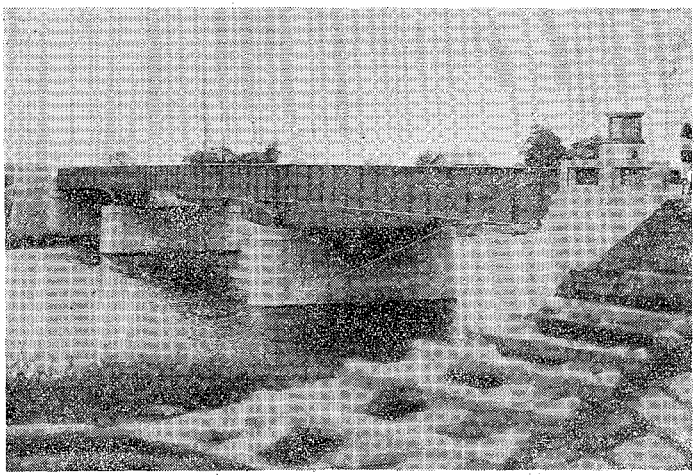
二、工事の大要

本橋は內務技師永田年氏の苦心の設計に成つたもので、

左岸アプローチは市街の關係上無暗に路面を上げるわけには行かず、また桁下高は梯川の高水位で制限されて居る。止むなくハーフ・スルーのゲルバー式鋼鈑桁橋とし美觀と實用とのバランスを採り、且鋼材の如きも工費充分ならざる事とて重量の輕減に隨分苦心されたと聞いて居る。



昭和十年五月最終の中央徑間架設の光景



小松大橋全景

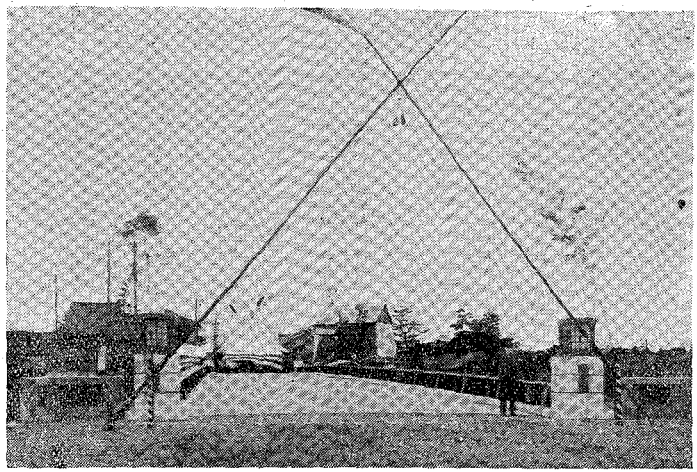
本橋の寸法は大要、左の通りである。

橋長　七六米八、
中央三一米兩側二二米五
有効幅員　七米五
有効面積　五七六平方米

橋臺及橋脚は共に重力式混凝土造とし、其の基礎は松丸

太の杭打を施行した。當橋脚には深堀に備へて周圍に長二米の矢板工を施した。

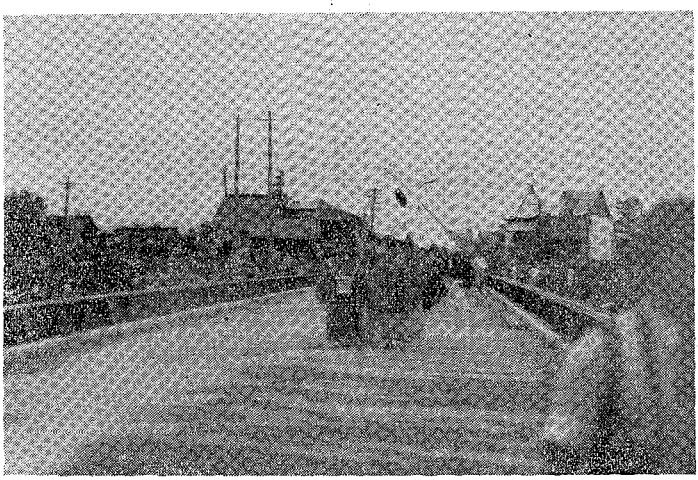
橋體は前記の如く徑間三連のゲルバー式鋼鈑桁橋でハーフ・スルーとし主桁の上部は高欄の代用となつて居る。



前直式橋竣

床版は鐵筋混凝土造とし、路面は一―一・五―三の混凝土鋪裝とした。

親柱及兩側緣石には花崗岩を使用し、尙各親柱上に照明燈を裝置した。



渡橋式

本橋工事は內務省直轄國道の一で內務省新潟土木出張所の管轄に屬する。鋼鈑桁の製作及架設を大阪

鐵工所の請負とした外は全部直營で施行した。昭和九年十月着手し同十年八月竣工した。

三、重なる材料と工費

本橋に使用した重なる材料。

鋼材	一六七瓲
セメント	三〇〇瓲
砂	五八〇粒
砂利	一、一五〇粒
栗石	三七六粒

工費

上部構造	四一、一五六圓
下部構造	三四、八四〇圓
計	七五、九九六圓

（以上）

琵琶湖廻周道路の完成

赤木忠晴

富士が日本の寶なら琵琶湖も亦日本の寶であらう。殊に江州の名を產んだ琵琶湖である本縣にとつては正に寶以上のもので現に農業、漁業、工業、發電、水道、水運、觀光等利用肆にして惠澤まことに豐である。

單に觀光上より觀るも四時三百五十萬の遊覽客が湖國へ湖國へと殺到する事實がこの太湖の持つ魅力を語るものと言へよう。この天惠を益々開發し、普く施設を充實して、惠まれたる此の鄕土を汎く內外に紹介喧傳することは本縣官民の大切なる義務であり、又恩惠に報ずるの道でもあると思ふ。近時官民の努力によつて遊覽、休養等觀光上の紹